氏名	中村　仁美
ヨミガナ	ナカムラ　ヒトミ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第679号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）「美術教育」における観察による描画表現の可能性 －「みてかく」授業の意義と、その内容や方法－ （作品）春に

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	渡邉　五大
（論文第１副査）	東京藝術大学	特任講師	（グローバルサポートセンター）	ヤマモト　アン　トモコ
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津　文哉
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	丸山　智己

（論文内容の要旨）

本研究は、小・中・高等学校の図画工作科・美術科における、観察による描画表現を題材として扱うことの可能性を、その活動の意義と、内容や方法について探ることで見出そうとする、制作論を基盤とした美術教育論である。

筆者は、11年間、公立小学校の普通学級で、全科を担当する担任を務めてきた。その後、東京藝術大学での制作実践を通して、ものやことから感じられるエネルギーを「みる」ことや、世界の一体感を感じることに価値を見出した。

本研究におけるエネルギーとは、「すべてのものやことから感じられる存在感」のようなものである。本研究では、筆者の制作実践から、エネルギーとはどのようなものかということを、概念的に掘り下げることを試み、研究の目的を補完する。

「美術教育」における観察による表現は、造形あそびの導入以降、減少の一途をたどる。観察による表現の題材が消えゆくことに疑問を感じたことが、本研究の動機である。アートが思考や行為そのものと化した現代における、観察による描画表現という営みの意義を再考する。

概念的に示した観察による描画表現の意義を、「美術教育」の現場で授業として成り立たせるため、実際の授業実践を例に、観察による描画表現の授業づくりの、具体的な内容と方法についても考察する。そして、それをもとに、「美術教育」の現場で授業実践を行い、観察による描画表現の意義と内容や方法を検証する。

結論として、本研究から考えられた、「美術教育」における観察による描画表現の意義には、まず、表現の悦びを基盤とし、自分軸を形成したり、イメージをもつ能力を育んだりすることがあげられる。その上に、あるがままの価値観や、統合的感覚の獲得、成り立ちの把握などの、多様な世界観の獲得を通して、人間がより豊かに生きるための資質を育むことが考えられる。

本研究の独自性は、筆者の制作実践から得られた価値の基準をもって、「美術教育」を再考し、筆者の観察による描画表現の授業実践をもって、「美術教育」に還元しようと試みていることである。その背景には、授業も、相互作用を内包したある種の表現であるとの考え方がある。

本研究は、子どもたちの学びを豊かにし、美術を専門とする教員はもちろん、美術を専門としない教員の「美術教育」への理解を助けることを目的としている。

本論文は、全７章、本論２部構成で展開している。

序章では、本研究に至った背景と、目的及び問いと方法、博士論文全体の構成、先行研究と、本研究における概念及び基本的前提について述べる。
第１部では、「観察による描画表現の意義とは何か」を問う。
第１章では、筆者の制作実践を通して、「多様な”みる”と表現の質に感じられるエネルギーの世界」について考察する。ここでは、観察による描画表現の先行研究や、作家の作品、筆者の作品制作過程から、多様な”みる”のあり方をとらえ、中でも、エネルギーを「みる」ことによりひらかれる世界観を掘り下げていく。
第２章では、第１章で見出された、エネルギーの世界を仮定し、「観察による描画表現の営みと意義」について考察する。”みる”、“見る”、「みる」ことに基づく、質の異なる観察による描画表現ごとに、その営みの意義を検討する。
第２部では、第１部で見出した「意義が生かされうる『美術教育』における授業の内容と方法とはどのようなものか」を問う。
第３章では、授業の内容と方法を考えるための基礎研究として、「観察による描画表現の変遷と内容や方法の課題」を探る。ここでは、教科書を手がかりに、「美術教育」における観察による描画表現の衰退の実態を、子どもたちの表現の質でとらえ、変遷の背景と、課題に迫る。
第４章では、第３章で見出された課題を克服すべく、「藝術教育としての『みてかく』授業の内容と方法」について考察する。具体的な授業実践事例から、外界へはたらきかけ、「自分軸」をもって真剣に突き詰める、藝術教育としての「みてかく」授業の内容と方法を検討する。
第５章では、筆者の教育実践である、「藝術表現としての『みてかく』授業への挑戦」を通して、「その内容と方法」を検証する。本研究では、授業も藝術表現になりうると考え、筆者の授業の手前をもとに、世界観を広げ、敬意と感謝の心を育む藝術表現としての「みてかく」授業を実践し、その構想と実際の授業結果から考察する。

結章では、第１部「観察による描画表現の意義とは何か」と、第２部「その意義が生かされうる『美術教育』における授業の内容と方法とはどのようなものか」という、２つの大きな問いについての結論をまとめ、「『美術教育』における観察による描画表現には、どのような可能性があるか」を見出したい。

以上の検討・考察を通して、「『みてかく』授業の意義と、内容や方法」から考えられる、「『美術教育』における観察による描画表現の可能性」について述べる。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、「美術教育における観察による描写表現に焦点をあててどのような可能性があるのか」と「授業の内容と方法はどのようなものか」という２つ問いを、複数の質的研究方法で検証することを試みている。
当該論文の特色は以下の点にみられる。まず、本論文の独自性は、申請者が美術の制作実践から得られた価値観と美術教育の実践から得られた問題意識から生まれる。大学院の制作実践を通して体験した世界の一体感に価値を見出す。小学校で担任を務めた経験を通して、観察による表現の減少を問題視する。そこで「観察による表現」を「世界の一体感」と関連づけることが当該論文の原点になる。
美術制作と美術教育の実践者として見出した価値観と問題意識を、さらに研究者として質的な研究方法で検証する。当該研究の基礎となる「世界の一体感」という価値観を「すべてのものやことから感じる存在感」として捉え、それをさらに「エネルギー」として概念化する。 “みる”、“見る”、「みる」という質の異なる観察を定義する。その中、エネルギーを「みる」ことが世界の一体感につながると定義する。先行研究や作家の作品や申請者の作品制作過程の考察によって、「みる」ことの意義を検討する。授業の内容と方法を考えるため、戦前と戦後の教科書を手がかりに観察による描写表現の衰退を検証する。そこ

で見出された課題に対して具体的な授業実践事例と申請者が実践した授業を考察する。結論として、観察による描写表現は自分軸を形成することや人間を豊かに育むことがあげられる。
制作実践という内面的な経験に基づいた価値観を客観化する試みが当該論文の挑戦的な点になる。ここで定義される美術の実践に基づいた価値観は、心の豊かさを尊重することによって美術教育の意義と可能性を広げることに貢献する論文といえよう。ただし、最終的にその価値観を受け入れられるかどうかは、読者の判断に委ねることになるので、普遍性を求めるべきではない。共感できるかどうかにも関わらず、描画表現の衰退の検証や授業内容の構想は教育実践者にとって示唆に富む内容を有すると考えられる。
以上のような点から、審査会においては課程博士論文の水準に十分達していると評価され、全員一致 で合格とした。

（作品審査結果の要旨）

中村仁美の博士申請作品「春に」は申請者が持っている独特の心象風景である柔らかな雰囲気の作品の中に観客を取り込もう、という趣旨で制作されたものであり、インスタレーションという既存の形にとらわれず作品の設置にも考慮した作品である。
和紙の手漉きを根本から勉強し、自身の目指す作品の顔つきを求めた努力は、作品の質感に表れていると考えられる。当初の作品制作形態は和紙を手でカットして抜いていく方法から、当時の新工法であったレーザーカッターを使用したものであったりと、申請者が思い描く作品の形を追い求める為の必然として、様々な試行錯誤があった。
結果的に申請作品として提出され審査対象となった「春に」は複数の工程を経て漉き込まれた和紙の微妙な質感を盛り込んだ大規模な吊り下げ型の作品となった。申請者が入学当時からずっと持続して考えてきた、周囲を優しい空気で取り込んでいく、という1点を何とか形に出来ないか、という曲折の現時点での到達点だと思われる。
審査の過程においては、永年教員生活を続けてきた申請者の感覚が、作家のそれとは若干異なるベクトルを持っていたこともあり、作品制作というものにすべてを注ぎ込む藝大の学生になるために多年の時間を要した。その辺りの紆余曲折も、本作品を審査するうえで無視できない事であった。いわばその壁を如何に突き抜けることが出来るか、このことは作品の完成に大きな影響を及ぼす項目であった。周到に下描きやマケットを繰り返し制作し、本制作に備える体制作りもこれほどの規模の作品になるとイメージトレーニングも含めて大きな要因となる。
それらを、申請者はひとつひとつこなし、結果的に破綻のない範囲で作品の完成に進んでいった。結果として、申請者本人の持つ独特な世界観を現す独特な作品となった。
インスタレーションの様な顔つきを持つ作品の展示形態を実現するためにも申請者が高所作業資格を取得するなど、大きな努力をするなどの努力も含め、作品にかける労力をも一見、見せない様な柔らかな雰囲気の作品世界を実現したことが審査委員として評価し、合格とした。

（総合審査結果の要旨）

科学の眼でみれば全てのもの、物質は分子や原子でできている。このことはもちろん理解はしているが、日常生活においてあるモノと対峙したときに、私達はそのようには認識していない。もっと複雑な感覚や感情を持ってモノを認知しているはずである。
古来より数多の芸術家が何かの対象に宿る本質、生命力、存在感、実存、パワー、といった「みえないものをみる」ために創造活動を続けてきたこととは無関係とは言い切れないだろう。
申請者もまた、独自の紙漉き技法の素材によるインスタレーションである審査作品『春に』において、春の陽だまりの中の光に感じた、言葉では言い表せないような「尊さ」を表現している。

また、申請者は学校教育現場での美術・図画工作の授業において、観察による描画表現の題材が減少していく現状に危機感を抱き、この「ものやことから感じられる存在感」のようなものを「エネルギー」と捉え、このエネルギーを「みる」こと、そして「かく」ことの意義と内容や方法を制作実践研究と授業研究の両面から明らかにしようと在学中取り組んできた。
そして、制作実践研究から考えられる美術教育における観察による描画表現の意義として「自分軸の形成」と「イメージをもつ能力を育むこと」。さらに「あるがままの価値観の獲得」や「統合的感覚の獲得」「成り立ちの把握」などの「多様な世界観の獲得」を通して、人間がより豊かに生きるための資質を育むことである、と考察した。
また、授業研究から考えられるこの表現の意義として、「自分をわかる」ことにより「自己肯定感」や「自信」をもつこと、「自分を好きになる」などの「自分の内へ」はたらく意義と、「世界をわかる」ことや「統合的感覚」をもつことで、「世界が自分ごとになる」ため、「積極的思考や行為」が促される「自分の外へ」はたらく意義があると考察した。
これらの考察から「エネルギーをみてかくこと」が表現の悦びを基盤とし、自分軸を形成したり、イメージをもつ能力を育んだりすること。その上にあるがままの価値観や統合的感覚の獲得、成り立ちの把握などの多様な価値観の獲得を通して、人間がより豊かに生きるための資質を育むことである、と結論づけている。
以上のような点から、本研究はこれらで考察された知見を教育現場に還元することで、児童・生徒たちが豊かに生きる一助となりうると、審査会において課程博士審査論文、審査作品ともに水準に十分達していると評価され、全員一致 で合格とした。